

人か魔女か幻想か 抗うも、屈するも貴方次第。

伊豆諸島、六軒島。全長一〇kmにも及ぶこの島が、観光パンフに載ることはない。
なぜなら、大富豪の右代宮家が領有する私的な島だからである。

年に一度の親族会議のため、親族たちは島を目指していた。議題は、余命あと僅かと宣告されている当主、金蔵の財産分割問題。
天気予報が台風の接近を伝えずとも、島には確実に暗雲が迫っていた…。

六軒島大量殺人事件（一九八六年一〇月四日～五日）

速度の遅い台風によって、島に足止めされたのは一八人。電話も無線も故障し、隔絶された島に閉じ込められた。彼らを襲う血も凍る連続殺人、大量殺人、猟奇の殺人。台風が去れば船が来るだろう。警察も来てくれる。船着場を賑わせていたうみねこたちも帰ってくる。そうさ、警察が来れば全てを解決してくれる。俺たちが何もしくとも、うみねこのなく頃に、全て。

うみねこのなく頃に、ひとりでも生き残っていればね…？

貴方に期待するのは犯人探しでも推理でもない。貴方が”私“をいつ信じてくれるのか。ただそれだけ。
推理がしたければすばしい。答えがあると信じて求め続けるがいい。

貴方が”魔女“を信じられるまで続く、これは永遠の拷問。



Episode1 Legend of the golden witch

一九八六年一〇月四日。一八歳の右代宮戦人は親族たちとともに六年ぶりに六軒島を訪れることになった。
目的は、毎年恒例で開かれている親族会議に参加するため。久しぶりに顔を合わせた親戚や屋敷の使用人たちとも懐かしく語らう彼らだったが、その一方で大人たちにとっては、今年のその会議にはもうひとつ重要な目的が。それは、余命まもないとされる当主金蔵の遺産相続のことだった。
そんな中、戦人は六軒島に住まうとされる魔女、ベアトリッチェの話を聞かされる…。

Episode2 Turn of the golden witch

身分違いの殿方への恋に思い悩む紗音と、自由で解放された世界に強い憧れを抱く嘉音。そんな二人の使用人の前に魔女ベアトリッチェが姿を現し、人を愛することの幸せを説いて甘言を囁きかける。魔女の力を得て、願いを叶える紗音。しかし嘉音はその中に潜む邪悪な真意を察し、その誘いをはねのける。その選択の行方はいったどこに向かうのだろうか…？
一方、魔女の存在を否定する戦人はベアトリッチェに勝負を挑み、惨劇の謎を解き明かしてみせると宣言する。赤い真実の推理バトルの火蓋が、ここに切って落とされた…。

Episode3 Banquet of the golden witch

親族会議のため六軒島へと向かう船の中、絵羽が夢の中で見たのはかつての記憶。父の後継者として認められたいと努力し続けながらも、「女」ということだけでそれを肯定されなかった悲嘆と失望。しかし、若き日の「彼女」は語りかける。「願いは叶う。そう信じ続けることこそが、私たち“の魔法”だ…。」そして、夕食の席上で披露されたベアトリッチェからの手紙。そこに記されていたのは莫大な量の黄金の在処。それを最初に手に入れた者が右代宮家の後継者の資格を得る、とのことだった。
「黄金は、私が見つけてみせる…！」絵羽はそう心に誓って、謎の解明に乗り出す…。

Episode4 Alliance of the golden witch

六軒島の最後の親族会議が開かれてから、一〇数年後。成長した縁寿は兄の戦人や真里亚たちの記憶を掘り起こしながら、かつての親族会議の席上で一体何があったのか、思いを馳せていた。
太平洋の孤島で起きた謎の事故と、消えた親族たち。そこから戻ってきたのは、叔母の絵羽ただひとりだけ。両親と兄を一度に失った縁寿は彼女の庇護のもと育ったが、本当に知りたい真実は何も知らず、何も知らされないうままだった。縁寿は慕っていた真里亚の日記帳をひもときながら、彼女が常に口にしていた魔法の存在について考え始める。使う人に幸せをもたらすといわれるが、怪しげで信じがたい謎の力。そして、そんな彼女の命と財産を狙って暗躍する者たちがいた…。

